

東京都渋谷公園通りギャラリー 交流プログラム「渋谷ラジオ」

令和5年度番組「ふたたび交わるおどろき」

ゲスト1:末永史尚さんをお招きした回のうち、#3のテキストです。

【ギャラリー(佐藤)のコロナ禍:臨時休館と映像編集】

○佐藤 真実子 じゃあ、「あしたのおどろき」については結構じっくりとおしゃべりができたかなと思うんですけども、次はですね、この「あしたのおどろき」のときから始まりつつあったコロナ禍についてお話していきたいなと思います。

○末永 史尚 はい。

○佐藤 このコロナ禍というのは、ここまでの約3年間ぐらいのことを言うのかなと思うんですけども、先ほどもお話ししたとおり、ギャラリーは「あしたのおどろき」の途中で緊急事態宣言で臨時休館してしまった後、次の2つの展覧会は会期が変更されて実施されました。ですけど、あの頃って、緊急事態宣言は結構途中で、コロナの感染者数の上下によって割と、いつ出るかみたいな感じで冷や冷やするというね……

○末永 そうでしたよね。

○佐藤 感じだったと思うんですけども。だから、「あしたのおどろき」の後の2つは、会期変更で実施はされたんですよ。なんだけど、その次、2021年に入ってからの最初の展覧会というときに、やっぱりまた緊急事態宣言が出てという感じなんですね。なぜかというか、まともや私の担当の展覧会でして。(笑)

○末永 (笑)

○佐藤 このときは「アール・ブリュット ゼン&ナウ」という新しいシリーズを立ち上げて、初回なので、私が個人的に関心があった「文字」に焦点を当てて、「レターズ ゆいほどける文字たち」という展覧会を企画したわけですね。ここの前に(置いてあるような)蛍光ピンク色の結構目立つチラシとかポスターも用意して、準備万端で、もう展示まで仕上がっていたんですが、開けられないということになって、臨時休館で会期は変更になり、開幕も延期になっちゃったと。会期を変更して、さらに変更したところも開幕延期になったんだけど、ようやく開けられたんですよ。開けられたんだけど、3週間後にまた閉まっちゃった。だけど、最後の1週間、開幕までの1週間はまた開けられたという、非常にいびつな開館状態というか。合計で1か月弱ぐらいの開館だったんですね。

なので、かなり私自身としては、コロナ禍のあおりを受けて、非常に我慢というか、いつ開けられ

るのかという思いでいたような。やっぱり出展作家の皆さんの心配もありますから、そういう状況が続いたというのがあったんですが、閉まっている間、学芸員がただずっとじっとしているということではなくて。

○末永 そうですね。

○佐藤 展示は出来上がっているわけですけど、開けられない。でも、その頃は、外に出られないんだけれども、オンラインで何か楽しめるコンテンツを作ろうというのが私たちのギャラリーでもありましたので。なので、「あしたのおどろき」のときはイベントは結構全部中止になったり、トークもだったんですけども、この「レターズ」のときはですね、もうやるべきイベントを全部オンラインで。ギャラリートークの1個はできなかったかな。オンラインではしていないんだけど、トークイベント的なものは全部オンラインで、オンラインミーティングシステムを使って収録して、それを編集して全部配信するという。なので、私もあんまり映像のチェックは、編集自体はプロの方に頼みましたけれども、チェックというのなかなかそんなに多くしたことはなかったんですけども、その当時……

○末永 ほとんどの方がそうだったと思うんですけどもね。

○佐藤 今となってはみんな慣れてきちゃったということがあると思うんですけど。そのときは休館していたけれども、6本の映像をずっと……

○末永 (笑)

○佐藤 (笑) 撮っては確認、撮っては確認という。うちのギャラリーは情報保障という面でも、字幕を全部つけているんですね。なので、字幕のチェックとか、そういったものもあって、かなりこの当時の、「レターズ」の時期を思い出すと、私は結構映像との闘いというか……

○末永 そうだったんですね。

【末永さんのコロナ禍：作品と向き合える時間】

○佐藤 そういう大変だった記憶があったんです。ギャラリーではそんな感じというか、私自身のコロナ禍というそういう感じで進んできたんですけども。末永さんのコロナ禍というのはどんなだったのかなと思って、「あしたのおどろき」以降についてちょっと、作家の活動とか大学のお仕事とかについて伺っていきなと思うんですけども。

○末永 はい。そうですね。どこからお話ししましょうかね。一番多分影響を受けたのは、大学もそうだったし、この頃、割といろんなところからお声がけいただいていた子供向けの造形ワークショップのお仕事は全部なくなりましたね。ちゃんとスケジュールされていたものもあったんですけど、

なくなりました。

○佐藤 やっぱり対面がベースになっているものというのはもう軒並みキャンセルになりましたよね。

○末永 そうですね。

○佐藤 だから、ワークショップとかは本当に如実に。

○末永 どんなに工夫してもやりようがないというような状態だったと思います。

○佐藤 うんうん。そういう中で、外で何か関わりながらすることとかというのは一時期減ったりというのはあったと思うんですけど、展覧会とかもやっぱり、ギャラリーとか、ああいったように、美術館が割と、展示施設自体が閉まるとかという中でしたもののね。

○末永 そうですね。その意味で、やっぱり「あしたのおどろき」展が途中で会期を終えてしまったのが一番大きなダメージではありました。(笑)

○佐藤 (笑)

○末永 寂しいーと思いながら。(笑)

○佐藤 本当に寂しいという、メールで、本当に無念ですみたいな感じでしたよね。(笑)

○末永 発表する以外のところで言うと、制作上は実はすごい調子よかったですよ。

○佐藤 ふーん。

○末永 外に出られないというのは、出なくていいということなので。

○佐藤 そうですよ。

○末永 僕みたいなスタジオで作品と向き合うタイプのアーティストにとっては、割といい環境だったのではと思うことは後からあります。

○佐藤 うんうん。そういうときに何かこう……

○末永 雑念が入らないです。

○佐藤 うんうん。あの貴重さというのは、大人になると結構感じる場所ですけど。

一方で、やっぱりそういったイレギュラーな事態で、結構コミュニケーションとかも、オンラインではできるんだけど、人とは会わないとかになって、逆にダメージを感じるような作家の人もいたのかなと思うんですけども、末永さんは逆だったと。

○末永 そうですね。(笑)

○佐藤 (笑) じゃ、結構制作自体はめちゃめちゃ進みましたか。

○末永 そうなんです。結構幸せな時間だったと思います。(笑)

○佐藤 (笑) じゃあ、もうコロナ禍の「禍(わざわい)」というのは、逆に使わないほうがいいぐら

い。

○末永 いや、すごく久しぶりに筆がのった時間だったかなとは思っています。

【末永さんのコロナ禍：自分の作品の見え方／リサーチの方法が変わる】

○佐藤 ああ、そうですか。そういう中で、これまでの作品のシリーズがありますけれども、集中できるといふこと以外に何か新しい観点が加わったとか、そういったいい意味での変化というのはありましたか。

○末永 うーん、、、そうですね。自分の作品の別の意味を見つけ出すみたいなことはあったかもしれないです。検索結果画面の絵(「サムネイル・ペインティング」シリーズ)で、美術の情報を得るのもインターネットを中心にするようなことが多くなってきていて、間接的に絵から学ぶみたいな、自分の状況を照射するような、振り返るような作品ではあったんですけど、実際に展覧会を見に行けない状態になって、インターネットで情報を集めるしかなくなったときにその絵を眺めてみると、やっぱり窮屈さの表象みたいな、そういうふうに分の作品が見えてきてしまつて。状況によってこんなに絵の見え方が変わってしまう、作っている自分にとつても変わってしまうんだみたいなことは思いました。作るものが変わるかという、そこはないんですけど、でも、そういう環境の変化つてやっぱりじわじわとあるものなので、今後関係してくるのかなとか思ったりはしますけれど。

○佐藤 そういったオンラインというのが、「しかない」じゃないけど、かなり限られた、でも、唯一に近いような。その中での種類というのはいろろできたとしても、それに限られてくるというのは、やっぱり窮屈さを表すことにもなるかもしれないですね、それまでの絵画は。でも、見え方がやっぱり状況とか環境によって、同じ作品でも変わってくるというのは、時代が変わっていくと昔の絵がまた全然違つて見えてくるように、そういった現象はあるのかなと思いますけど、そういったことも感じられたということですね。

○末永 あと、「ピクチャーフレーム」のシリーズも、実はあの後継続して制作しているんですね。調子がよかつたというのも実はその「ピクチャーフレーム」のシリーズなんですけれど。あれも、ここで発表したときと、あと、愛知で発表したときの作品つて、実は実際自分が見た額縁しかモチーフにしていなかつたんですよ。ただ、その後、2020年に「ピクチャーフレーム」、額縁の作品だけで個展を開催したんですけど、そのときのピクチャーフレームつて、ほぼ間接的に見た額縁なんです。

○佐藤 ああ、なるほど。

○末永 ネット上で見つけた額縁。それも、だから、ある意味行けない美術展を、データから自分で作り出すみたいな。

○佐藤 そうですよ。

○末永 そんな展覧会だったんですけれどね。

○佐藤 そこにはやっぱりコロナで制限された移動とか、そういったのが逆に、だから、実際に見たことないものだけの額を描いたということですよ。なかなか、でも、ネット上だけで額の取材をするというか、リサーチするのは難しくないですか。

○末永 実は、例えばストリートビューが入っている美術館とかあるんですよ。

○佐藤 ええ、ありますよね。うんうん。そうだと、結構高精細……

○末永 側面が見られたりするんですよ。

○佐藤 なるほど。結構、側面とかをちゃんとリサーチされるじゃないですか。その辺りはと思ったんですけど、そういうことですね。

【末永さんのコロナ禍：人に会う／会わない、人と話す／話さない】

○佐藤 じゃあ、お仕事、制作ではそういう感じで、逆に制作が進んだという感じですけど、日常生活とかは、そちらも順調というか、あんまりストレスも感じることなく、楽しめたって感じですかね。

○末永 それは、いいこともあり、悪いこともありという感じですかね。人に会わなくなっちゃいましたね。それは大きいかと思います。

○佐藤 うんうん。会わなくても済むようになっちゃったというんでしょうか。

○末永 普通に顔を合わせるぐらいだったらできるんですけど、長い時間話すというのがそのときはできなかったですね。無駄話をするとか。

○佐藤 そうですよ。それが一番なくなったかなとは思いますが。必要なことだけ、会ったときとかは。オンラインのミーティングのシステムを使うと、声が重なっちゃうと聞こえないということがあったので、誰かがしゃべっている間はずっと聞いているとかだし、声の交差というのがなかったですよ。

○末永 うん。

○佐藤 そうすると、何てことないおしゃべりというのをするのをやめるという。(笑) 遮るというのはちょっとはばかれるというか、そういうのがあったかなとは。

○末永 そうですよ。

○佐藤 でも、人との交流とか、仕事とは言わないですが、何かアイデアが生まれるときって、打

合せしようとかと思ってしたときに生まれるときもあるけれども、そうじゃない、本当にぎっくばらんなおしゃべりのときに意見を交わしたことによって、何か新しいものが協働で生まれるということはあると思うんですね。

○末永 そうですね。

○佐藤 そういうのはやっぱりコロナ禍では割と、機会が1回なくなったかなと思いますね。

○末永 去年ぐらいからそういう機会も増えてきたので、ちょっとずつ昔のことを思い出しながら、こうだった、こうだったと。

○佐藤 そんなに昔ではないんだけど、大分昔みたいに……

○末永 そうなんですよ。

○佐藤 思えてきちゃいますよね。うんうん。確かに。

じゃあ、最初はちょっと、コロナ禍、どうですかというので、割とマイナス面をイメージするというほうが、私のほうは結構マイナス面というか、閉まっちゃったりとかということでしたけど、末永さんはプラスの面も多かったという。(笑)

○末永 (笑) あとは、そうですね。通常ということのありがたみをかみしめるとかですかね。

○佐藤 うんうん。逆に、ちょっと今はまた忙しくなっちゃって、籠もる時間はなくなっちゃって、ちょっと悲しいみたいな。(笑)

○末永 (笑) まあ、一長一短ということで。

○佐藤 一長一短ですよ。(笑)